

「今、思うこと」

富山市立速星中学校 一年 笹本 想

今から約半年前、私達は、迫る卒業に向けて、ラストスパートをかけ、沢山の事に取り組んでいた。そんな時、先生から告げられた事、それは「休校」の二文字だった。

「あと学校に来るのは、二日と卒業式のみです。」正直、その時の私の気持ちは、絶望に近かった。これからどうなるのか不安だったし、このまま小学校生活を終える事に悔しい思いが大きかった。

時間と共に、現実を少しずつ受け入れ、未来を見られるようになったが、私達がすべき事、出来る事は何か、答えはどこにもなかった。今までと違う日々の中で私達がやりたい事は出来るだろうか。そして、何より私達が本当に伝えたい事が伝わるだろうか。不安は大きかったが、私達は足をとめず、常に進み続けた。正しい方向に進んでいるのかなんて分からないけれど。

下級生と過ごせる最後の二日間は、大事な時間だった。伝えたい事、したい事は沢山あった。でも時間がない。焦りと混乱の中で、私達は話し合いを続け、そして、辿り着いた答え。それは「歌」だった。たくさんの言葉は伝えられなくても、歌に全ての気持ちを乗せて届ける。私たちに出来る最大限の事だった。歌にこめた想い、私達が一番伝えたかった「ありがとう」そして「学校をよろしく」という事。距離は離れていたが、下級生の凛とした表情を見ると、しっかり伝わったと感じた。

そして迎えた卒業式。下級生の姿はなく、呼びかけは書面で配

られた。その現実を私達は受け入れていたが、ひとつだけ譲れない事があった。

「歌を歌わせてほしい。」

それだけで良かった。歌には、想いを届ける力がある。マスクを着けたままでも、きつと強い想いがあれば届く。そう信じて、懸命に歌った。きつと想いは届いたと思う。先生や保護者の方の涙を見て思った。それは、私も同じだった。自分で歌いながら、みんなの歌を聴きながら、自然と涙が流れた。達成感からだった。沢山の事があった。辛い事、上手くいかない事、嬉しい事、楽しい事。やり遂げられなかった事もあったけれど、悔いはなかった。今、出来る事をやりきったから。

「休校」という現実を突きつけられたあの日から私達は進み続けている。壁にぶつかっても、前が見えなくても。

私は、休校中に気付いた事がある。それは、当たり前なんて存在しない事。初めて、日常を奪われ、今まで当たり前だと思っていた事は、「幸せ」だったと分かった。毎日学校に行けて、友達がいて、家族がいて。明日があつて、そしてなによりこの命がある事がどれだけ幸せな事かと。

中学入学後の休校を経て、私達は、新しい日常を歩み始めている。前の日常とは違うけれど、今、私は学校に毎日通えている事が本当に幸せだ。先生や友達に会える事、授業や部活ができる事、何一つ当たり前ではない。だからこそ、この幸せを大切に、今の一瞬一瞬を大事に、精一杯生きていきたい。

「明るい未来につながると信じて：」